

私の兄がこんな不幸なわけがない

ラビット晴晞

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すべてを終わらせて、平和な日常を取り戻した上条当麻。

だが、そんな平穏も長くは続かなかつた。

父刀夜に急に義妹が出来た、と言われ、実家に赴いた彼が見たものは……

少年はそこで過去と向き合う。

——科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

注意

俺妹勢をあまり出すつもりはありません。

世界観、キャラ、雰囲気がよく幻想殺しにそげぶされました。

それでもいいよと言ってくれる方は、どうぞよろしくお願いします。

目次

設定集的な挨拶的なにか	1
俺に義妹が出来ました	3

設定集的な挨拶的ななにか

物語の前提条件。

舞台設定はとある世界は上条当麻が二年になる前の春休み。もつと言えば、新訳22巻のもうちよい経ってからである。なので、基本的には上条と京介の入れ換えではないです。

上条の両親は、桐乃の趣味については知っている。知っているうえであえて容認している。

御坂美琴のおかげで、上条は辛くも高校二年生の進級できた。春休みを補習なしというおまけ付きで（まあ、桐乃に案内しなくてはならないので、結局学校には行くことになるのだが）

春休みは本当に魔術とか超能力とかとは関係ない日常なんでそこから辺もご了承頂きたい。

上条当麻

本作の主人公。

相変わらず不幸な少年で、その右手にはイマジンプレイカー幻想殺しを宿している。

序盤は、桐乃の立ち直らせるために色々行動を起こして頑張る。

毎度のごとく事件に巻き込まれたり、首を突っ込んだりしてらしく、一ヶ月に一回の割合で入退院を繰り返している。

上条桐乃

旧姓は『高坂』

彼女以外の高坂家の全員が謎の事故に巻き込まれて亡くなってしまい、親戚であった上条家に引き取られ、春休みが終わったら学園都

市の上条の学校に転入することになる。

あとは概ね原作と同じだが、オタク趣味は事故を乗り越えるまで出
来ないでいる。

バレる流れは原作と同じ。春休み中には打ち明ける流れにするつ
もり。

インデックス

ご存知10万3000冊の魔導書を内包したシスター。

桐乃とは基本的に仲はいいが、メルル派とカナミン派でいつも喧嘩
になる。

そして何故か、その怒りの矛先は上条へと収束することになる。イ
ンデックスにあまりオタク趣味を見せたくないという上条兄妹の意
向でオタク活動は大体が桐乃宅で行われることになる。

御坂美琴

ご存知、常磐台の電撃姫。

上条の鈍感さにイライラしつつも、めげずにアプローチを繰り返して
頑張っている。おそらくこの世界ではインデックスと同じくらい
には親しくなっている。

そのインデックスとは、相変わらず折り合いは悪いが、たまに料理
を作ってくれるので以前ほどではない。

桐乃とは幼少の頃に面識がある。ただし、お互いにその事を忘れて
しまっている。

夏休みからはおそらくメインヒロインに繰り上げるだろう。

上条刀夜

上条の父。

春休み中は仕事を休んで上条と桐乃が親しくなれるように、春休み
中には色々取り計らってくれる。

春休みのあとは、夏休みか大覇星祭まで登場しない。

上条詩菜

上条の母。

桐乃が立ち直るきっかけを作ってくれる立ち位置にいる。

俺に義妹が出来ました

わたくし、上条当麻には妹がいる。

いや、この表現は正確ではないな。訂正しよう。

わたくし上条当麻には妹ができた。

高校二年生の春、上条当麻は兄という肩書きを得たのだ。

だが、ここで一つ勘違いしてはいけない。俺は別に血の繋がった妹が出来たのではない。血の繋がっていない義理の妹なのである。

なにそれ？どんなラブコメ？

皆はそんなこと思ってるんだろうな。期待してくれちゃってるんだろうな。本当に思い期待だよ。重圧にしかかってないよ。

突然だが、上条当麻は不幸な人間である。

道を歩けば、なにもないところで転ぶし、道端の糞を踏み抜くし、自販機にお金は飲み込まれるし、なにもしてないはずなのに、居候には噛まれ、爪楊枝で刺され、鋭い爪で引っ掛かれる。

そして、そんな俺はいま住んでいる学園都市ではなく、実家の前にいる。

これを説明するには、昨日まで遡らなくてはいけない。

昨日は丁度春休み初日だった。

御坂のおかげで、補習と留年を免れた俺は一週間自由という貴族特権を使ってダラダラと……

「とうま、朝ごはんはまだなのかな。もう待てないんだよ」

なんてことは出来るわけもなく、朝から暴飲暴食シスターの世話をしなくてはならなかったのだ。

彼女の名前はインデックス。10万3000冊の魔導書をその記憶のなかに内包するシスターであり、訳あって俺の家に居候している。

と、説明している間に朝食が出来たので運んでしまおう。

「ほくれ、今日は野菜炒め肉入りだぞ〜」

「肉入り!? おお、ちんまりとだけど肉が入ってるんだよ、とうま!! どういうことなのかな!?!」

「そうだろ、そうだろ、なにせ父さん達が進級祝いに仕送りをくれたからな。これから春休みは毎食肉か魚が食べれるぞ〜」

「ほんとなの!? わーいなんだよ」

「おい、人間。私の分はまだか」

家のもう一人の居候である、全長15cmの元魔神オティヌスが自分の朝食を急かす。弁当の仕切りに使うアルミの皿に野菜炒めを乗せて出す。米も同じように出している。

そして、飼猫であるスフィンクスにもキャットフードを差し出し、異音同口でいただきます、と言いながら食べ始める。

インデックスは速攻で食べておかわりを取りに行き、オティヌスはその少ない量を一口一口を噛み締めるように食べる。

「とうま、これからどうするのかな?」

「んー、そうだな。特に予定もないし、皆でどっか遊びにでも……」

プルルルルル

なんだよ。こんな時に電話かよ。

箸を置いて、受話器をとりながら無難な対応をとる。

「はい、上条ですけど」

『当麻か。父さんなんだが……』

「父さん？なんだよ、急に？」

『いや、家に戻ってきてくれないか。もう手続きはほとんど済ませてあるんだが……』

「え、なんで？」

珍しく少し動揺した様子で、俺の父、上条刀夜は俺に帰郷するように求める。

そして、俺の言葉で会話が途切れてから数秒後、覚悟を決めたように一言を告げた。

『当麻、お前に義妹いもむとができたんだ』

——は？」

は!?!えつ、えつと……その……は!?!

いやいやいやいやいやちよつと待て。夢かこれは夢なのか、よし、一回ほっぺたつねってみよう。夢じゃない、そうか……夢じゃないのか……

つてことは、なんだ、なんなんだ妹つて、妹つてあのいもうとか!?!あのいもうとつてどのイモウトだ!?!

頭が混乱する。

うまく思考が纏まらない。おそらく落ち着くだけで数秒、思考を取り戻すのにさらに数秒くらい掛かったと思われる。

やつと言葉にできる頃には、先程とは逆に洪水のように言葉が流れ出てきた。

「おい、おい、ちよつと待てコラア!てめえ、自分がいま何歳なのか自覚してんのか!?!いや『そういうの』に子供が口出すべきではないけど、アンタその年になってまで母さんに……」

『あ、いやすまんすまん。別に『そういうの』とかではないんだ。いや、私としては、別に『そういうの』でもいいんだが……』

「ちよつと待て。さらつと聞き捨てならないこと言ったよな。それに
ついて小一時間追及させるクソ親父」

そして、俺の制止という名の暴言を振り切って、電話のスピーカー
から、父さんの口から今度こそ、正真正銘意味不明な単語が聞こえて
きた――

『当麻、お前の「従兄弟」が『義妹』^{いもうと}になつたんだ』

はっ………へ？

ポカン、と口を開けたまま立ち尽くして、およそ十三秒。

「なんじやそりやあああああああああああああああ
!!!???
」
絶叫した。